

支え合うきよせ委員会（清瀬市生活支援・介護予防サービス提供主体等協議体）

第3回 A 部会高齢者110番検討チーム 記録（案）

日時	平成 30 年 11 月 6 日（火）13 時 30 分～15 時	場所	清瀬市役所 第 1、2 委員会室
出席者	委員：内田委員、田中委員、田島委員、名古屋委員 事務局：鈴木（直）、上垣係長 生活支援 CO：鈴木（智）、森、原田、鍵和田		
欠席者	なし		

1 前回の振り返り

鈴木 CO より前回の記録について報告あり。

補足事項として、小平市で取り組まれている「こだいら認知症週間」について情報共有あり。相談会や認知症カフェ、認知症サポーター調整講座などが一週間の間に取り組まれている。

2 高齢者 110 番の提案について

➤ 以前より、地域包括支援センターの名称がわかりづらく、市民に浸透させるためにどうにかできないかという議論あり。

➤ 清瀬市より、支え合うきよせ委員会として地域包括支援センターに提案できないかと話あり。地域包括支援センターの名称変更ではなく、地域包括支援センターの名称に「高齢者 110 番」などのわかりやすい表現を追加することで、市民に、高齢者の相談窓口があることの浸透を図ることが狙い。

→事前資料では「要望書」となっており、表現が重くなる。提案という形に。

➤ 提案の内容は、「市内の支え合い活動を推進するための提案書（案）」となっており、高齢者 110 番検討チームで検討することではない。「市内の支え合い活動を推進するための」は、支え合うきよせ委員会の本会で検討する内容。

→提案のタイトルについては、今回の内容に絞り込んだ名称とする。

→以前、老人いこいの家の活用に関する話題も出ていたように思う。そうしたことも提案に盛り込むことはできないか。

➤ 高齢者 110 番で切り分けた 3 つの機能「相談窓口機能」「110 番機能」「生活支援機能」はどれも重たい印象。前回の検討チームで意見が出されていたようなオレンジリングを着用する取り組みが実施しやすくしていいのではないか。

→高齢者 110 番（仮称）という名称はインパクトが強い一方、言葉の印象から様々な機能をイメージしている。そこで、検討メンバーが持っていたイメージを話し合い、結果として 3 つの機能として整理した。その中で、実施したいと思っていたが、対応が難しい取り組みも出てきた。検討の為にもう少し時間が欲しい。

➤ 「最近、近所で新聞紙がたまっている」というように地域の中で気づくことができる人を増やすことが重要。全国で 1 千万人以上いるといわれる認知症サポーターは、養成後の活動・活躍の場に焦点が当たることがある。自身が認知症サポーターであることを再確認してもらえるような取り組みを企画・広報すれば、気づきが豊かな人を増やすことにつながっていくのでは。世界アルツハイマー月間というものがあり、このうちの 1 週間を、オレンジリング着用を促す認知症週間としてはどうか。

→オレンジリングは、専門職は名札などにつけやすいが、市民は着用の場面や方法が多くなり、しまいこんでいる人もいます。認知症週間を実施するのであれば、着用をただ促すだけではな

く、オレンジリングの意味や取り組みの趣旨について市報等で広報し、認知症に早期に気づき声をかけてサポートするきっかけにしてはどうか。

⇒中間報告をまとめ、第3回本会にて資料として提出することを全体で確認。資料の叩き台は生活支援コーディネーターが作成して委員にメール送付し、部会内で内容を確認する。本会後のA部会で内容の精査を行う。

3 中間まとめ

3つの機能	今後の方向性
相談窓口機能	高齢者の相談窓口としての認識を浸透させるため、「高齢者110番」というわかりやすい名称の使用について地域包括支援センターに提案する。
110番機能	向こう三軒両隣の関係が薄れていく課題があるなか、地域の中で人と人をつなぐことのできる人（地域で気づきの目を増やすこと）の存在が重要となっている。 新しい取り組みを企画するのではなく、既存の仕組みや資源（ふれあい協力員、認知症サポーター等）を活かした形で取り組みを進めていくことができないか議論したところ、認知症サポーターの方を対象とした取り組みの実施について今後は検討を進めていくことを確認した。相談窓口機能の「高齢者110番」とも取り組みがつながるよう調整すべきと意見があがっており、今後の課題となっている。
生活支援機能	生活支援の仕組みづくりであり、支え合うきよせ委員会の本会で議論したい。

4 今後の予定

(1) 次回検討チーム開催日程

・ 月 日 () 時 分 ~ 時 分

(2) 本会・部会

・ 11月20日(火) 13時30分~14時30分